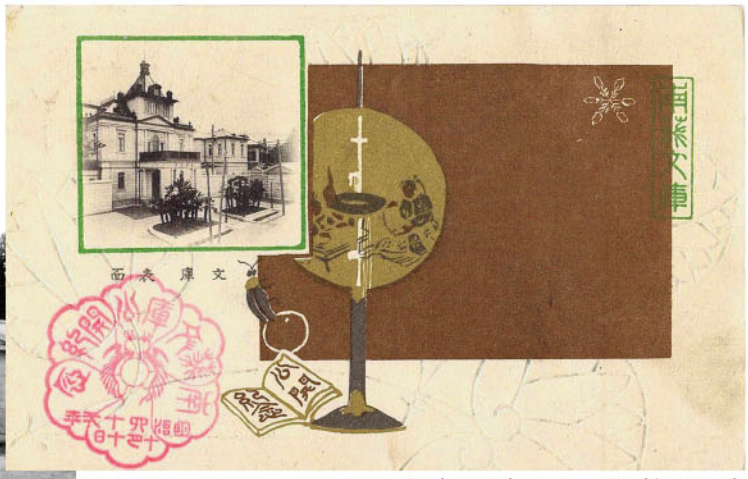
南葵音楽文庫アカデミー
THE ACADEMY OF NANKI MUSIC LIBRARY
Newsletter

南葵文華

2020.11.30
第 2 号



▲個人蔵（海南市）　▼個人蔵（和歌山市）

▲南葵文庫外観　▼閲覧室

南葵文庫公開紀念絵はがき（1908年）

図案は日本画家の結城素明（1875-1957）。1904年に母校の東京美術学校に助教授で迎えられ、1944年まで教授を勤めた。帝国芸術院会員。

日本図書館協会の全国大会を６回開催、協会本部に隣接した徳川関連施設（我善坊町）を提供するなど、徳川頼倫と南葵文庫は揺籃期の図書館界に大きな貢献をしました。

閲覧室の椅子

庫主室の頼倫

図書館人 徳川頼倫と彼がめざした「理想」

図解 南葵文庫

庭園から見た南葵文庫

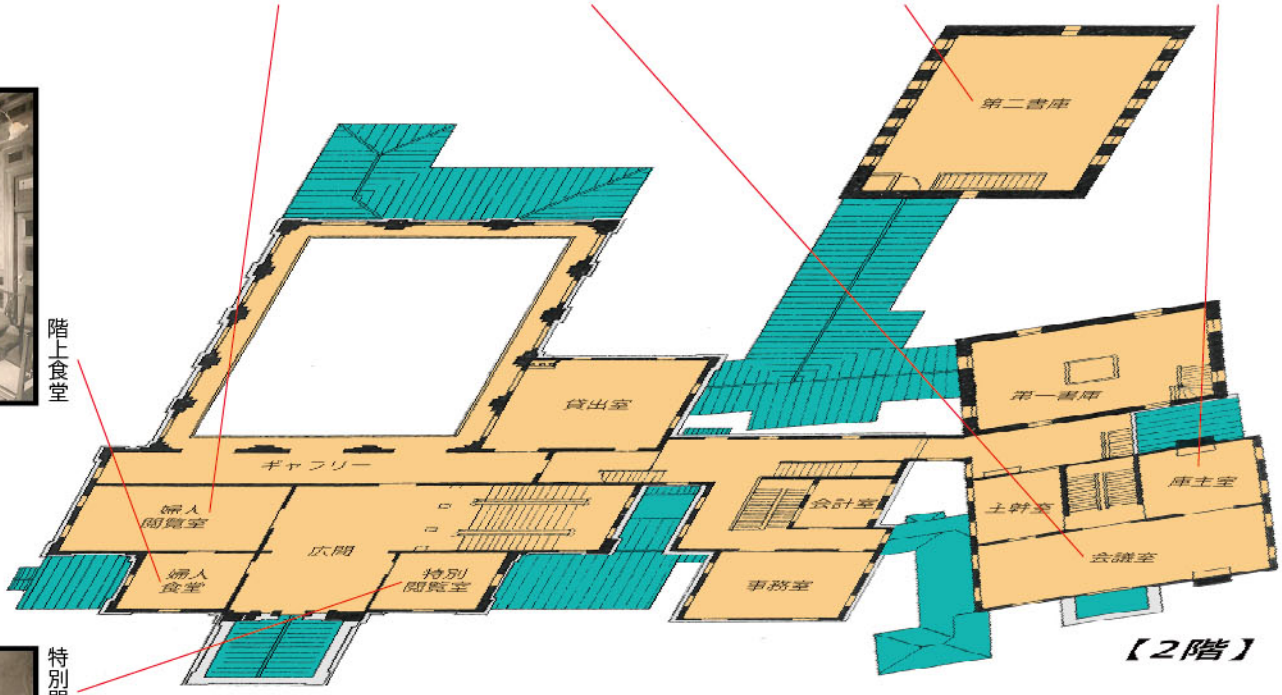
婦人閲覧室

会議室

第２書庫

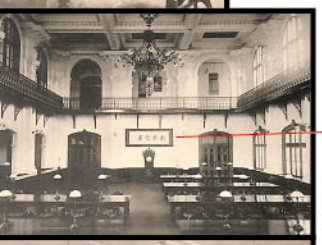
庫主室

階上食堂

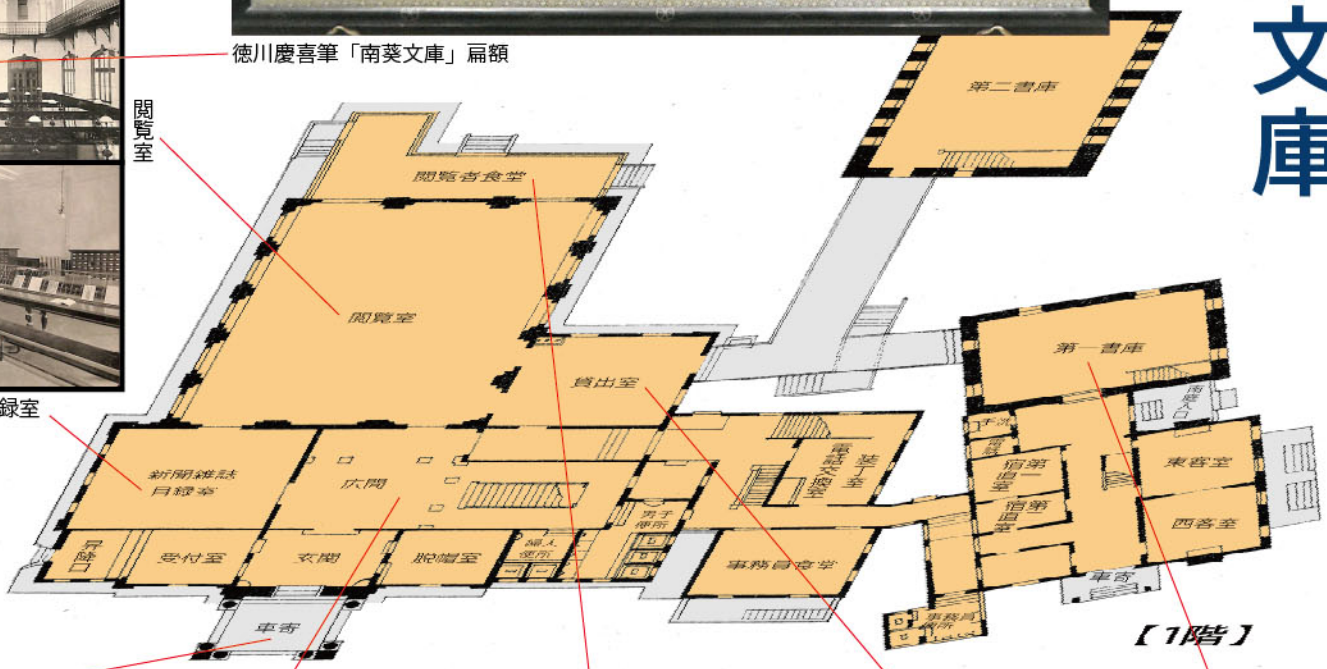


特別閲覧室

徳川慶喜筆「南葵文庫」扁額


閲覧室

新聞雑誌目録室



車寄　広間階段　１階食堂および庭園　貸出室　第１書庫

南葵音楽文庫アカデミー【夏カレッジ】

佐藤春夫と音楽

2020年8月8日

新宮市役所庁舎別館大会議室

講師：林淑姫

佐藤春夫（1892-1964）
佐藤春夫記念館蔵

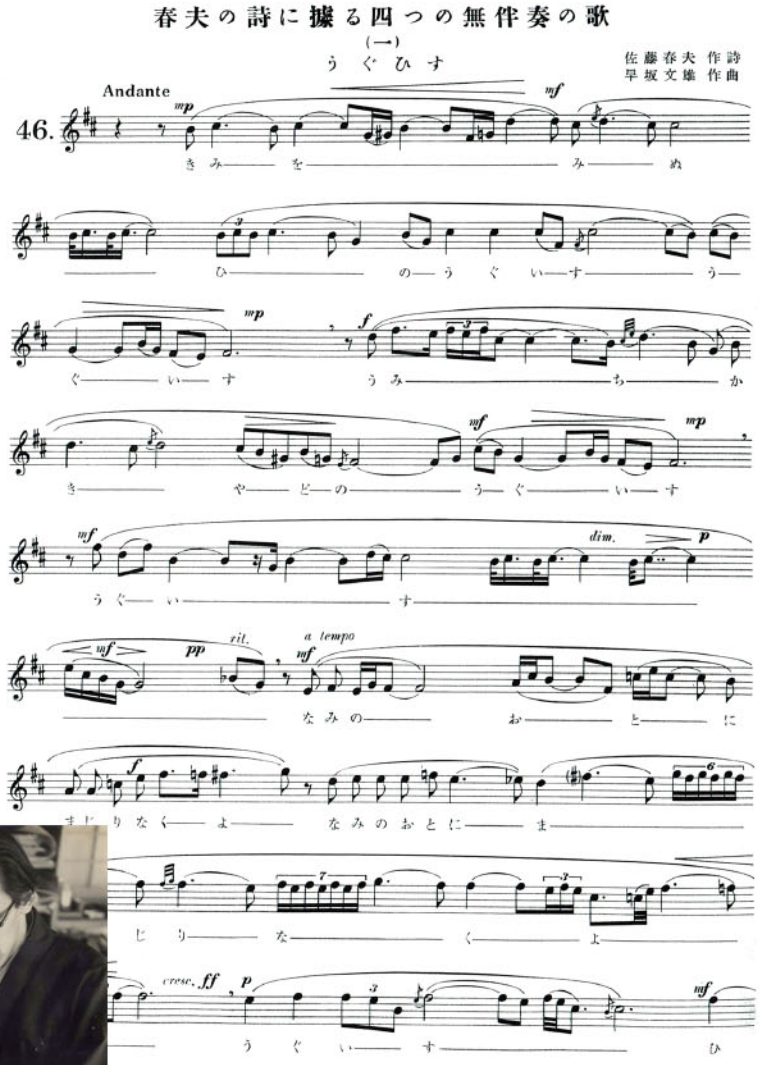
佐藤春夫が音楽について語ることは少ない。本人は「視覚型であって聴覚型ではない」と繰り返し自らを規定しており、伝聞した芥川龍之介の言「フランス語を知らず、音楽を解しないのは、佐藤にとって気の毒だなあ」を引用しつつ、「みることには祝福されて美術は多少わかる気でゐるわたくしが、聞くことには全く恵まれないで、音楽のたのしさといふものは全く知らない」と記し、重ねて「音楽的才能の絶無なわたくし」という（「詩文半世紀」1963）。小学校で習った唱歌には曲よりも歌詞に興味をいだいていたし、中学時代の記憶にある歌は與謝野鉄幹「人を恋ふる歌」や土井晚翠「星落秋風五丈原（ほしおつしゅうふうごじょうげん）」である。それらの歌詞がもつ意味に惹かれて好んで歌ったという。彼が挙げた二つの曲はどちらも明治 40 年代に学生の間で流行したマッチョな文語調の長詩で、曲は当時のはやり歌によくみられるヨナ抜き音階、符点リズムのシンプルで吟唱風なものだ。歌詞についていえば後者は三国志・諸葛孔明の戦記をうたった難解な漢語混じりの全七章中の第一章「祁山（きざん）悲秋の風更けて」を初行として七節からなる。それを佐藤春夫は晩年に至ってなお間違いなく暗唱できるというのだから驚かされる。同年生まれの徳川頼貞が幼児のころ「元寇（四百余州）」（永井建子作詞作曲）をはじめとする軍歌や唱歌の旋律になじんでいたことを思い起こすと両者の違いはあまりに明快である。

という具合で音楽に関して詩人が残した文章は意固地に思える程の拒絶反応が先行する。そうである以上、この詩人と音楽について述べることもある意味では無謀なのかもしれない。

けれども、彼が残した詩群、とりわけ「殉情詩集」（1921）や「佐藤春夫詩集」（1926）など初期の詩集には、詩人の心象が眼と耳を通して結晶する瞬間を感じさせる作品が少なくない。たとえば「うぐひす」（「佐藤春夫詩集」1926）、

君を見ぬ日のうぐひす。
海近き宿のうぐひす。
波の音にまぢりなくよ。うぐひす。
ひねもす聞くよ。うぐひす。
うぐひす。うぐひす。うぐひす。

早春の海辺の宿で聴くうぐいすの啼く声の描写はひとを待つ詩人のこころを浮かびあがらせる。打ち寄せる波の音に混じって遠く近く聞こえてくる姿を見せぬうぐいすの声に詩人は身を任せる。実際にその声が聞こえたかどうかは分からないと思わせる情景でもあるが、うぐいすに仮託した詩人の心に通底する感性は音楽である。この詩に早坂文雄（1914-1955）は小節線を排した拍節のない自由なリズムに旋法を意識したロ短調の旋律をのせ、詩句の韻律を響かせる方法を採って、無伴奏のソプラノのための作品を作曲した（《春夫の詩に拠る四つの無伴奏のうた》第 1 曲。1944）。詩最終行に三度繰り返される「うぐひす」は詩人の屈託する、抑制された情念を伝えるが、作曲家はさまざまに音型を替え、拍を替えてこれを増幅させ、情念を表出させる。作曲家が自ら「自信作」と記した傑



早坂文雄作曲《うぐひす》（1944）
『日本歌曲集 III』（世界大音楽全集声楽篇36）音楽之友社　1958

早坂文雄（1914-1955）
日本近代音楽館蔵

佐藤春夫詩集
第一書房（1926）※左は外函 「うぐひす」所収

作である。

佐藤春夫の詩の世界はロマン派的な歌曲作法では収まらない音楽の可能性を示唆し、作曲家を刺戟したようだ。佐藤春夫の詩に漂う東洋的感性は詩に向き合う作曲家たちを惹きつけるとともにそれを表現するための課題を意識させる。早坂作品にみられるこの感覚は佐藤の詩を最初に作曲した本居長世（1885-1945）の《水辺月夜の歌》（1924）に通じるものがある。そして戦後の作曲家芥川也寸志（芥川龍之介の三男）の若き日の歌曲《車塵集より》（1949）にも。

芥川也寸志（1925-1989）

西條八十は佐藤春夫の詩作を評して「流麗とはいえない一種詰屈した雅語体の詩風のなかに、何ともいえぬ洗練された音楽をひびかせる作家である」という（「詩のつくり方」1947）。的確な指摘だと思う。

佐藤春夫の詩は、詩人本人の嗜好とはかかわりなく、すぐれた耳がとらえたことばの響きと詩人の屈託する内面に向けられた視線によって現代歌曲の創出を促す。彼の詩は逆説的かもしれないが散文に比べて理知的な佇まいを見せている。研ぎ澄まされた感性から生まれる詩想は幼いころから詩人の内部にたくわえられた古今東西の伝統的詩型、あるいはまったくの自由詩の詩型を存分に駆使して表現される。彼の詩の固有なうつくしさが古典的な雰囲気を湛えるのはそのためである。

佐藤春夫は戦時下に多くの詩を書き、戦後には校歌や市歌のような団体歌を少なからず残した。付曲されることを前提としたときの彼の詩作法については機会を改めたい。

photo：佐本守

南葵音楽文庫アカデミー【秋カレッジ】

英国の音楽：アイルラ

2020年9月12,13日

橋本市教育文化会館 第1研修室（12日）
和歌山県立図書館 講義研修室（13日）

講師：守安　功／リコーダー
守安雅子／アイリッシュ・ハープ
木戸麻衣子／リコーダー（13日のみ）
佐々木勉

南葵音楽文庫の中核に位置する重要な資料群であるカミングス文庫から、アイルランドやスコットランドなどのイギリスの周辺地域の音楽を収録した楽譜集を紹介するとともに、そこに記された音楽を実際に聴いて楽しむことを目的としたレクチャー・コンサート。これは、演奏をお引き受けくださった守安ご夫妻が、アイルランド音楽の研究家でもあることによる。また、ご夫妻の提案を受けて、17 世紀頃に音楽愛好家を対象に出版された資料も併せて紹介することとした。

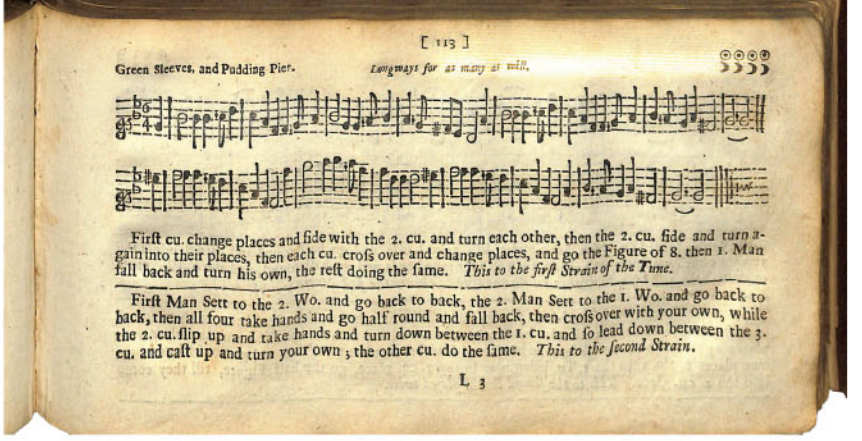
「カミングス文庫」という呼称は、もともとそれらが 19 世紀ヴィクトリア朝のイギリスを代表する音楽蔵書家ウィリアム･ヘイマン･カミングス（1832 ～ 1915 年）が収集したものであることに由来する。1917 年のこと、徳川頼貞は、カミングスの死後、遺族の手元に残された蔵書の一部を購入した。それは、後に「南葵音楽文庫」と呼ばれることになる、日本で最初の音楽専門図書館の蔵書を充実させるためだった。

カミングス文庫は、手写楽譜をはじめ、印刷楽譜、音楽書（刊本）などから構成され、資料数は 700 点を超える。カミングスは、演奏家、教育者、研究者として活躍しており、収書の範囲は非常に広かった。数千点に及んだと推察されるかつてのカミングスの旧蔵書の全容は不明だが、南葵音楽文庫に継承された資料だけを見ても、年代的には 16 世紀から 19 世紀にまで及び、ジャンルも教会音楽から器楽曲まで多岐にわたる。

前半は、映像による資料紹介が中心。先ず取り上げたのは、《アイルランドのミューズ》（1789 年頃出版、カミングス文庫整理番号 N-5/4）と題された、アイルランドのバロック期を代表する音楽家のターロック･オキャロラン（あるいはオ・キャロラン、1670 ～ 1738 年）の作品を中心に編纂された旋律集。守安ご夫妻には、この旋律集に収録された『キャロランの処方箋』と『エドワーズ夫人』という曲の演奏をご披露いただく。『キャロランの処方箋』では、

ターロック・オキャロラン
（1670-1738）

ンドの風



《舞踏教師》M-5/28
（1716 年）より
『グリーン・スリーヴス』

酒好きだった彼が、体調を崩した際に医者から断酒を言いわたされ、かえって体調を悪化させたという逸話に基づく曲であることを説明したが、受講者のみなさんにその哀愁を帯びた音楽はどのように響いたであろうか。続いてジョゼフ・ウォーカー著《アイルランド史に残るアイルランド・バードたちの歴史的記憶とアイルランド音楽についての考察》（1786 年、同 M-3/15）の紹介。《ハープシコードのための通奏低音を伴うスコットランドのカントリー・ダンス集》（1748 年頃、同 N-1/10）では、タイトルが言葉遊びになっている『フィドル・ファドル』の演奏を楽しむ。「好きなだけ何度でも（繰り返しなさい）」というこの曲の但し書きが笑いを誘う。ウィリアム・マクギボンが編纂した《スコットランドのリール集》（出版年不明、同 N-5/9）では、『召使いの子を私がものにするまで彼女は』が資料紹介の後に演奏された。タイトルの理解を巡って登壇者の間で議論となったが、演奏の面白さが理屈っぽい議論を吹き飛ばしてくれた。資料紹介は、イングランドとスコットランドの歌曲旋律を集めた《イギリスの音楽雑集、あるいは音楽の小道》（出版年不明、同 N-6/17）、《24 のカントリー・ダンス集》（1754 年、同 N-5/30）と続き、《愛鳥家の楽しみ》（1730 年頃、同 N-5/3）へ。これは、愛鳥家のために小鳥にさえずり方を教える教本で、実演では、いかにも小鳥たちのさえずりを思わせるリコーダーの独奏にみなが引き込まれた。

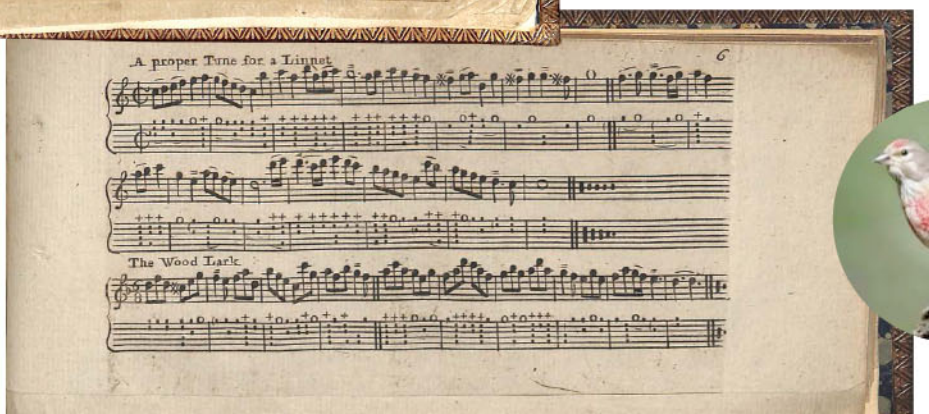
ジョン・プレイフォードによる《舞踏教師》（1716 年、同 M-5/28）では、日本でも広く知られた『グリーン・スリーヴス』が演奏された。この歌曲旋律は 17 世紀にイギリスで愛好されており、続いて解説した、当時イギリスで流行した「ディヴィジョン」と呼ばれる変奏技法の主題としても使われている。変奏技法については、ジョン・プレイフォードによる《ディヴィジョン・ヴァイオリン》（1688 年、同 N-5/11）をはじめ、カミングス文庫に収蔵される 3 点の資料を紹介したが、言葉だけでは解りにくい技法を実演によって確認することができた（特に 9 月 13 日開催のカレッジでは、主題を繰り返して演奏し、変化する変奏を重ね合わせるという、通常ではありえないことを即興的に行っていただいた）。

後半は守安ご夫妻の演奏会。受講者のみなさんのリクエストを受けながら、オキャロランの作品をはじめ、《愛鳥家の楽しみ》などからつぎつぎと演奏が披露された。受講者のみなさんは、演奏を十二分に楽しまれたようだった。

いつもなら言葉による説明が続くカレッジ講座であるが、このように南葵音楽文庫の資料が音にされるのを耳にすると、「音楽文庫」のもう一つの顔が見えてくるように感じられる。もっと音楽を楽しむことができる南葵音楽文庫を期待したい。

photo：佐本守

《愛鳥家の楽しみ》N-5/3
（1730年頃）



扉ページと「ムネアカヒワ」
のさえずり（譜面）

ムネアカヒワ

和歌山県立博物館で企画展「喜多村進と徳川頼貞」開催される

令和2年（2020）8月29日(土)～10月4日(日)

和歌山市出身の作家・俳人の喜多村進（1888～1958）は、大正３年（1914）から同13年にかけて南葵文庫に、昭和３年（1928）から同７年は南葵音楽図書館に勤務。主任司書として徳川頼貞を支えた。南葵音楽図書館の閉鎖後、昭和８年（1933）から和歌山県立図書館の司書となり、郷土文化の賞揚に尽力、同時に頼貞との交流もつづいた。

今回の企画展では、多くが初公開となる資料が並んだが、とくに頼貞からの書簡・絵葉書、南葵文庫や南葵音楽図書館に関する資料、南葵音楽図書館旧蔵資料が紹介された。また島崎藤村らとの交流から残された貴重な資料、喜多村進が残した文芸作品などが展示された。

【展示構成】

Ⅰ　若き日の喜多村進

Ⅱ　南葵音楽図書館と徳川頼貞

Ⅲ　頼貞からの手紙

Ⅳ　和歌山の喜多村進

（展示総数88件272点）

旧奏楽堂で企画展「徳川頼貞の至宝」開催される

令和2年（2020）11月8日(日)～12月2日(水)

パイプオルガンが南葵楽堂に設置・公開（1920年11月）されてから100周年…を記念する企画展「南葵音楽文庫～音楽を愛した殿様　徳川頼貞の至宝～」が、オルガンの移設された旧東京音楽学校奏楽堂で開催された。頼貞の弟である治の早世を悼み、本居長世が作曲した《涙の弊》の自筆楽譜、初版楽譜（いずれも旧奏楽堂所蔵）等も併せて展示された。

【主な展示資料（南葵音楽文庫所蔵）】

◎H.パーセル：オペラ《ディドとエネアス》Z.626(筆写楽譜)　◎J.S.バッハ：《クリスマスの讃美歌「高きみ空より我は来たりぬ」によるカノン風変奏曲BWV769》（初版楽譜）　◎J.ハイドン：《天地創造》初版楽譜　◎L.v.ベートーヴェン：シラーの頌歌「歓喜に寄す」による終楽章合唱つき交響曲（第9番）Op.125 初版楽譜　◎L.v.ベートーヴェン：《月光ソナタ》日本版初版楽譜　◎L.v.ベートーヴェン：直筆書簡(下書き)　◎L.v.ベートーヴェン：筆楽譜　諸国の民謡集(23曲)からロシア民謡《可愛い娘さんが森にゆき》の編曲WoO158-15

探しています！南葵関連資料

「南葵」の名前が誕生して120年。調査、関連した文書、印刷物（絵葉書、書物、冊子類、図書館関連資料など）、写真、フィルム、郵便物、文庫の管理運営に関わる記録、徳川頼倫・頼貞による書跡など。本号でも個人所蔵資料の写真を提供していただきました。

なお、怪しいモノを持ち込む輩もおりますので…鑑定、評価、買い取りは致しません。

▶徳川頼倫の軸（個人蔵（和歌山市））

南葵音楽文庫アカデミー【INFORMATION】

令和３年３月 カレッジ春

熟覧と細見　資料が語るヒストリー

3月5日（金）14:00～16:00

於　和歌山県立図書館２階 講義研修室

沈黙している資料も、じっくり観覧したり、細かく検分してみると、突如みずからの出生の秘密を、主人とその人となりを、いま和歌山にあるまでの流転を語り始めます。資料そのものが語る自分史と物語を、傍証や、ときには推理をまじえて紹介します。（担当：近藤秀樹、佐々木勉）

紀州徳川ゆかりの建築遺構

3月7日（日）10:00～12:00

於　旧和歌山県会議事堂（岩出市）

亀池公園（海南市）に現存する双青閣（写真左）は、もとは和歌浦にあった双青寮。海南市の篤志家が解体移築した。この徳川ゆかりの建築をとりあげ、その特徴や歴史を解説します。その後、会場である国の重要文化財旧和歌山県会議事堂（一乗閣）を講師とともに見学します。（担当：中西重裕）

聴講受付開始：令和３年２月５日（金）　定員になり次第締め切り

※講師、申込方法等の詳細は、南葵音楽文庫アカデミーのWEBをご覧下さい。→

https://www.lib.wakayama-c.ed.jp/nanki/event/academy/

重要資料説明会　［入場自由、申込不要］

令和３年３月６日（土）11:00～12:00

和歌山県立図書館（本館）南葵音楽文庫閲覧室

令和２年度選定した南葵音楽文庫重要資料の紹介をします。

南葵音楽文庫　レファレンスの案内

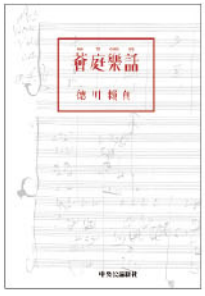
通常のレファレンスのほか、研究員が資料内容に関する質問に応じています。

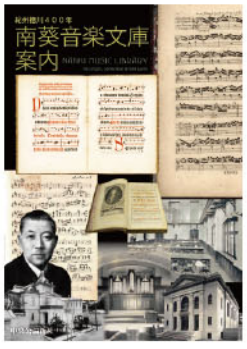
【今後の予定】12月４日（金）、６日（日）、

令和３年１月10日（日）、２月７日（日）、３月５日（金）

※いずれもアカデミー開催時間を除きます。

■近刊　紀州徳川４００年記念出版物





南葵文華第２号
令和２年11月30日発行

発行所
和歌山県立図書館
〒641-0051 和歌山市西高松1-7-38

編集
合同会社芸術資源研究所
〒640-8329 和歌山市田中町5-1-1 タバタビル704

編集協力
有限会社ティアンドティ・デザインラボ
〒649-2326 和歌山県西牟婁郡白浜町椿36